

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 24 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520658

研究課題名(和文)日本人英語学習者が使用する語用論的ストラテジーに関する共時的および通時的的研究

研究課題名(英文)Synchronic and diachronic studies on pragmatic strategies used by Japanese learners of English

研究代表者

大須賀 直子(Osuka, Naoko)

明治大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：40514162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人英語学習者が英語を使用する際の語用論的ストラテジーの特徴やその発達について、共時的および通時的の両面から探った。共時的データからは、日本人学習者は、依頼場面で直接ストラテジーを多用するなど、状況や場面に即した丁寧表現が上手くできていないことがわかった。一方、日本人留学生と非留学生の通時的データの比較からは、留学生の方がより母語話者に近い語用論的ストラテジーを選択するという結果が得られ、1セメスターという短期の留学でも、語用論的発達に影響を与えることがわかった。ただし、語用論的慣用表現の発達面では、きわめて限定的な習得しか見られなかった。また、留学後に母語転移の減少が見られた。

研究成果の概要(英文)：This study explores pragmatic features and development of Japanese learners of English through both synchronic and diachronic data. The analysis of synchronic data has revealed that Japanese learners have difficulty in using appropriate politeness depending on the situation. On the other hand, the comparison of diachronic data collected from Japanese study-abroad students and stay-in-Japan students has revealed that even one-semester study-abroad experience has positive effects on learners' pragmatic development. However, the effects on the development of pragmatic routines were limited, while pragmatic transfer from L1 decreased after study abroad.

研究分野：外国語教育(英語)

キーワード：中間言語語用論 スピーチアクト 依頼 断り 感謝 留学 pragmatic routines pragmatic transfer

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の英語教育において、語用論的指導はほとんど行われていない、と言っても過言ではない。その結果、日本人英語学習者は語用論的知識や運用力に欠ける傾向がある。たとえば、命令文に please をつけばどんなときも丁寧な依頼になると信じている学習者が非常に多い。英語を通じての異文化間コミュニケーションが身近となった現代では、誤解のないコミュニケーションを成立させるために、文法能力だけでなく語用論的能力を向上させることが重要である。そこで、限られた授業時間の中で、効率的に語用論指導を行うことが望まれる。そのためには、日本人学習者の語用論的特徴や発達の過程を明らかにし、どのような特徴が異文化間コミュニケーションで障害となるのかを解明することが必要である。

(2) 中間言語（外国語学習者が目標言語の習得過程で発する、目標言語とは異なった体系を持つ言語）の語用論的側面の研究を中間言語語用論と呼ぶが、この分野での先行研究は、依頼、謝罪、断りなどのスピーチアクトの特徴が異文化間でどのように異なるかを探る横断的研究が多く、同一対象者を通時的に調べる縦断的研究の数はまだ少ない。さらなる縦断的実証研究の蓄積が求められている。

(3) 英語圏に留学した日本人学習者の語用論的発達を通時的に追った先行研究はいくつかあるが、対象となるスピーチアクトが謝罪、依頼、助言などに限られており、データ収集方法も主に筆記による談話完成タスクが使われている。本研究では、コンピュータを使用して写真と音声で場面を提示し口頭による談話を誘出する手法をとり、断り、感謝などこれまであまり調査されていないスピーチアクトを対象に含めることとした。これにより、日本人英語学習者の語用論的能力の特徴や発達について新たな知見を得ることができると予想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本人学習者が英語を使用する際の語用論的ストラテジーの特徴やその発達について、共時的および通時的の両面から探ることにある。日本人英語学習者は、上級者でも、場面や相手によって丁寧さや表現を使い分ける語用論的知識や運用力に欠ける傾向にある。本研究では、まず英語母語話者との比較により、日本人学習者の語用論的ストラテジーの特徴を明らかにしたい。さらに英語圏へ留学した学生のグループと留学しなかった学生のグループを通時的に調査することにより、留学経験が語用論的能力に及ぼす影響や、語用論的能力の発達の過程を探りたい。また、どのような語用論的特徴が異文化間コミュニケーションの障害になるのかを、英語母語話者の容認度を調べることによって明らかにしたい。

3. 研究の方法

(1) 参加者

本研究の参加者は、英語圏に留学した日本人学生グループ、留学経験のない日本人学生グループ、英語母語話者グループ、日本語母語話者グループである。それぞれのグループの人数は各実験段階で異なったが、最終的には22人、20人、22人、20人であった。また、この他に評価者として英語母語話者4人が参加した。

(2) 調査方法

MET (The multimedia elicitation task)

MET は、Schauer (2004) によって開発されたスピーチアクトのデータ収集ツールで、コンピュータを使用して、写真と音声によって場面をリアルに提示し、回答者から口頭による談話を誘出する仕組みになっている。筆記による DCT に比べ、より実際の会話に近い回答が得られる上、実験参加者が全員同じ条件で回答するという点で、ロールプレイよりも比較性に優れている。もちろん、コンピュータが相手なので、対面の会話のようなダイナミクスに欠けるという欠点もある (Felix-Brasdefer, 2004)。

本研究で使用した MET は、研究者自身によって作成された。全部で 24 の場面シナリオを擁し、依頼 8 場面、断り 8 場面、感謝 8 場面から構成されている。それぞれのスピーチアクトの場面には、社会的変数（相手との上下関係）および状況変数（内容の重さ）が織り込まれている。すなわち、回答者の設定はすべて学生の立場であり、会話をする相手の設定は社会的地位が上である教師の場合と、対等である学生の場合がある。また、内容は、「鉛筆を貸してほしい」という軽いものから、「推薦書を書いてほしい」という負担の重いものまでが含まれている。

フォローアップインタビュー

日本人留学生には、留学後にインタビューを実施し、留学中に英語をどのように、またどのくらい使用したか、について調査した。また個々の慣用表現にどれくらい触れたかについても質問紙に基づいて調査した。

4. 研究成果

まだ分析中のデータもあるが、ここではすでに結果の出たものについて報告する。

(1) 共時的データの分析結果

英語母語話者 15 人、留学経験のある日本人英語学習者 15 人、留学経験のない日本人学習者 15 人に MET を行ってもらい、依頼の産出データについて分析した。

まず、各回答の主要行為部 (Head Act) に焦点を当て、The Cross-Cultural Speech Act Realization Project (CCSARP) (Blum-Kulka et al., 1989) および Schauer (2009) の分類モデルに少し変更を加えたものを使用して、各グループがそれぞれの場面（分析対象は 7 場面）でどのような依頼ストラテジーを使用し

ているかを分析した。依頼の主要行為部は大きく分けて、直接ストラテジー、慣習的間接ストラテジー、非慣習的間接ストラテジーの3つのカテゴリーに分類され、さらにそれぞれ下位ストラテジーがいくつか存在する。

Equal status, Low imposition

会話の相手が自分と同じ学生で、「鉛筆を貸してほしい」という負担の軽い依頼の場面(場面1)では、図1が示すように、英語母語話者(Native speakers of English-NE)のほとんどが“Can I borrow a pen?”のような慣習的間接ストラテジーの中の「許可」を求めるストラテジー(Permission)を使っていた。一方、留学経験のない日本人学習者(At home students-AH)は、“Please lend me a pen.”などの命令法を使ったり(Imperative)、“I want you to lend me a pen.”のような願望を述べたりする(Want statement)のような、直接ストラテジーを使った者が40%いた。留学経験のある日本人学習者(Study-abroad students-SA)は、NEのようにPermissionを使った者が半数近くいたが、“Can you lend me a pen?”のような、慣習的間接ストラテジーの中の「能力」を問うストラテジー(Ability)を使ったものも40%いた。直接ストラテジーを使った者はひとりもいなかった。

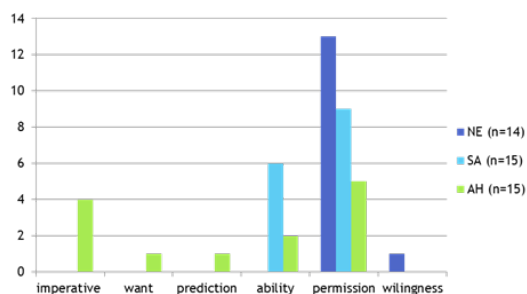


図1 場面1におけるストラテジーの使用

Equal status, Medium imposition

友人に「ノートをコピーさせてほしい」という中低度の負担度の場面2では、NEの大多数がやはり許可ストラテジーを使っているのにたいして、AHは50%が直接ストラテジーを使ってしまっていた。一方SAは、英語母語話者とほぼ変わらずPermissionを使っていた。(図2を参照。)

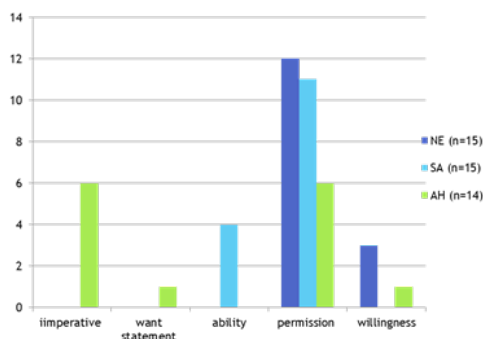


図2 場面2におけるストラテジーの使用

Equal status, High imposition

友人に「研究に協力してほしい」という負担度の高い依頼をおこなう場面3では、全員が慣習的間接ストラテジーを使用していた。中でも“Would you mind ...”のような相手の「意思」を問うストラテジー(Willingness)を使った者が一番多かった。SAは、Abilityを使ったものが一番多く半数に及んだ。一方、AHは本来丁寧でなければならないこの場面において、77%が、強制的響きのある直接ストラテジーを使ってしまっていた。(図3を参照。)

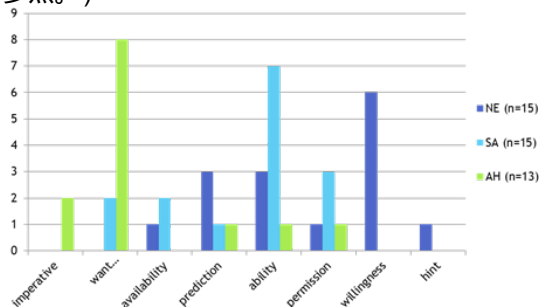


図3 場面3におけるストラテジーの使用

Higher status, Low imposition

社会的地位が上である教師に対して、「教室が暑いのでエアコンをつけてほしい」(場面4)、「もう少し大きな声で話してほしい」(場面5)という負担度の低い依頼をする場合、NEはAbility、Willingness、Prediction(例: Is there any chance...?やWill you...?)などの慣習的間接ストラテジーを使った。AHも同様のストラテジーを使うものが多かったが、直接ストラテジーを使った者も一部いた。一方SAは、両場面においてAbilityの使用に偏っていた。(図4、5を参照。)

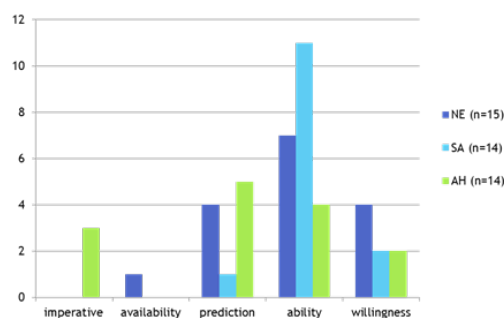


図4 場面4におけるストラテジーの使用

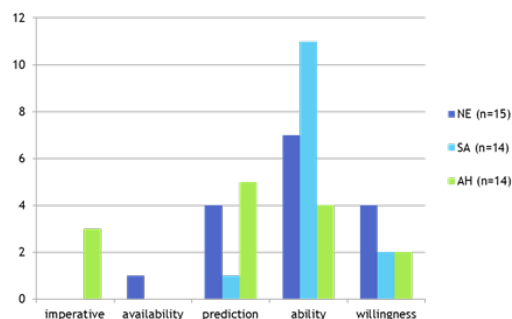


図5 場面5におけるストラテジーの使用

Higher status, Medium imposition
 教師に「レポート期限を延ばしてほしい」という中低度の負担の依頼をする場面(場面6)では、NEはPermissionやPrediction、Abilityのストラテジーを使っていたが、SAはAbilityの使用に偏っていた。また、AHは、本来丁寧でなければならないこの場面で、21%が失礼に聞こえる直接ストラテジーを使っていた。(図6を参照。)

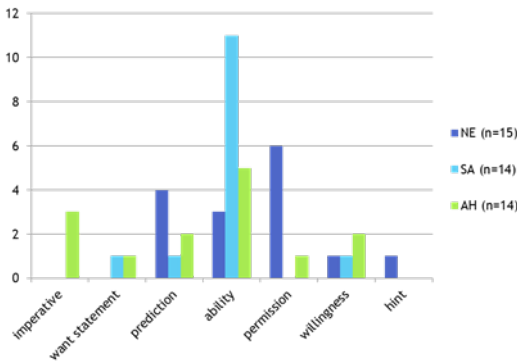


図6 場面6におけるストラテジーの使用

Higher status, High imposition
 忙しい教師に「留学のための推薦状を書いてほしい」という高程度の負担度の依頼をする場面(場面7)では、NEのほとんどは「I'm wondering if you could...」(Ability)や「Would you mind...」(Willingness)のような丁寧な pragmatic routines を使ったが、SAはこれまでの場面と変わらず「Could you...」や「Can you...」を使用していた。AHは、一番丁寧でなければならないこの場面で、50%が Imperative や Want statement の直接ストラテジーを使ってしまっていた。(図7を参照。)

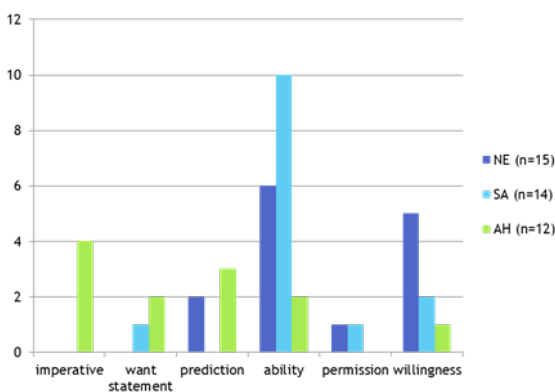


図7 場面7におけるストラテジーの使用

まとめ

以上の結果から、以下のような知見が得られた。

- 1) 英語母語話者は、対等な相手、軽い負担度の内容でも、依頼において直接ストラテジーは使わない。また、「I was wondering」や「Would you mind」のような pragmatic routines を頻繁に用いる。

- 2) 留学未経験の日本人学習者は、他グループに比べて直接ストラテジーを多用する。とくに、Higher status、High imposition のような丁寧でなければならない場面が多く使う。これは、知識の不足に加えて、内容が複雑で認知的負荷が多いときに、形式まで配慮する余裕がないことにも起因すると思われる。
- 3) 留学経験者は、ストラテジーの使い方が、未経験者に比べてより英語母語話者に近いが、一定のストラテジーに(AbilityやPermission)に依存する傾向がある。また、英語母語話者が多用する「I'm wondering if...」や「Would you mind...」のような、統語的にやや複雑な pragmatic routines の習得に至っていない。しかし、直接ストラテジーを使わない、という点で語用論的発達が見られる。
- 4) 以上報告した以外にも、日本人学習者は内的修正よりも外的修正に頼る傾向があり、それは留学を経たあともあまり変わらないという結果が得られた。

(2) 通時的データの分析

米国に留学した日本人学習者(JE)16人を対象に、留学の前後で、pragmatic routinesの使い方がどのように変化したかを探った。英語母語話者(NE)18人のデータをベースラインデータとして使用した。

まず Bardovi-Harlig (2009)を参照して基準を決め、NEのデータから以下の19の routines を抽出した。

1) 依頼

- Can I
- Could you
- I { ' m/am } wondering if
- {Do/Would} you mind

2) 断り

- No thank you/thanks
- I ' m good/fine
- Thank you/Thanks though
- I ' m/was saving (this seat)
- Noun is not [really] my thing
- not [really] into Noun
- {nnt}make it

3) 感謝

- Thank you
- Thank you so much
- Thank you for
- Thank you so much for
- I really appreciate
- I ' ll pay you back
- You didn ' t have to
- That { ' d/would } be + Adj.

JEの留学前と後で、19の routines の使用頻度の変化をグラフで表したものが図8である。

また、MET 回答におけるそれぞれの使用回数をフィッシャーの正確確率検定を用いて統計的に比較した。結果を表 1 と表 2 に示す。

留学前後を比べて、統計的に有意に差を示したのは、“Thank you so much” と “I really appreciate” の 2 つだけであった。すなわち、1 セメスターの留学が routines の発達に与えた影響は極めて限定的であった。

JE's production of routines pre- and post-abroad (%)

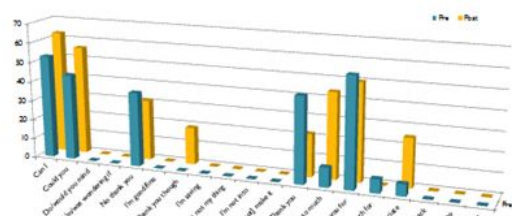


図 8 留学前後の Pragmatic routines の使用の比較

表 1 依頼・断りにおける Pragmatic routines の使用

Expressions	JE production		Fisher Exact Test (df)	NE Production
	Pre	Post		
Can I	53% (17)	63% (20)	.196 (1)	44% (16)
Could you	44% (7)	56% (9)	.724 (1)	41% (11)
{Do/Would} you mind	0	0		28% (10)
I'm/was wondering if	0	0		33% (6)
No thank you/thanks	38% (18)	31% (15)	.668 (1)	57% (31)
I'm good/fine	0	0		33% (6)
Thank you though	0	19% (3)	.226(1)	28% (5)
I'm/was saving (this seat)	0	0		44% (8)
Noun is not my thing	0	0		50% (9)
I'm not [really] into Noun	0	0		33% (6)
I'm [pretty] busy	0	0		28% (5)
{not} make it	0	0		56% (10)

表 2 感謝における Pragmatic routines の使用

Expressions	JE production		Fisher Exact Test (df)	NE Production
	Pre	Post		
Thank you	44% (14)	22% (7)	1.000 (1)	38% (14)
Thank you so much	10% (8)	44% (35)	.000 (1)	43% (39)
Thank you for	56% (9)	50% (8)	1.000 (1)	33% (6)
Thank you so much for	7% (1)	0	1.000 (1)	56% (10)
I really appreciate	6% (2)	25% (8)	.096 (1)	42% (15)
I'll pay you back	0	0		39% (7)
You didn't have to	0	0		39% (7)
That {d/would} be +adj	0	0		39% (7)

次に、留学を通じて pragmatic routines の発達があまり見られなかったことについて原因を探った。まず、留学中にそれぞれの routines をどれくらい使う機会があったかについて質問紙を用いて 4 件法で答えてもらい平均値を算出したところ、結果は表 3 のとおりであった。統計的に有意な差が出た “Thank you so much” と “I really appreciate” については、それぞれ平均値が 3.93、3.67 と非常に高かった。また、MET の回答における routines の使用頻度と、質問

紙により自己申告された留学中の使用頻度を相関分析したところ、 $r=7.06$ ($p<.01$) という高い相関関係が確認された。当然のことであるが、留学中にインプット、アウトプットの機会が非常に多くあったものが習得に結びついたと言えよう。

表 3 留学中の Pragmatic routines の使用頻度

Pragmatic routines	Input & output	Pragmatic routines	Input & output
Can I	3.87	{not} make it	2.93
Could you	3.87	Thank you	4
{Do/Would} you mind	2.8	Thank you so much	3.93
I'm/was wondering if	2.13	Thank you for	3.75
No thank you	3.77	Thank you so much for	2.75
I'm good/fine	2.6	I really appreciate	3.67
Thank you though	3.29	I'll pay you back	2.06
I'm saving Noun	1.77	You didn't have to	1.73
Noun is not [really] my thing	1.5	That {d/would} be great	3.13
I'm not [really] into Noun	1.43		

さらに、各参加者に routines についてインタビューを実施したところ、以下のような項目が抽出された。

- 1) 教室や教科書で習った表現は、自信や安心感を持って使うことができる。(例：Could you、Can I などの多用)
- 2) 日本語に類似した表現があると、使用しやすい。(例：I'm full などの多用)
- 3) 使い慣れた表現に頼ってしまい、それ以上バリエーションを広げたいと思わない。(例：Could you、Can I などの多用)
- 4) 内容を考えるのに精一杯で、形式にまで気を回す余裕がないので、文法的に複雑な表現は避けてしまう。(例：I'm wondering if、Would you mind の不使用)
- 5) プレゼントをもらったときに、“You didn't have to.” というのは失礼だと思った。(L1 と L2 の社会語用論的相違)

まとめ

上記のように、Pragmatic routines という側面での語用論的発達、1 セメスターの留学では極めて限定的であった。自然の習得に任せただけの場合、相当量のインプットとアウトプットの機会がなければ習得は難しいようである。では、どうすればより効果的な習得ができるかと考えると、やはり留学前または留学中の明示的指導が必要であろう。参加者へのインタビューからも、教室などで習ったことのある表現を多用する学習者の心理的傾向が明らかになっている。また、明示的に指導を受けていれば、インプットがあったことにより多くの気づきが期待できるであろう。さらに、留学後にもフォローアップの指導を行えば、長期的に存続する効果が期待できるのではないかと考える。

< 引用文献 >

Bardovi-Harlig, Kathleen. 2009. “Conventional expressions as a

prgmalinguistic resource: recognition and production of conventional expressions in L2 pragmatics”. Language Learning 59: 755-795.

Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (1989). Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies (pp.1-34). Norwood, NJ: Ablex.

Félix-Brasdefer, J. César. 2010. “Data collection methods in speech act performance: DCTs, role plays, and verbal reports”. In Speech act performance: Theoretical, Empirical, and methodological issues, E. Usó Juan and A. Martínez-Flor (eds), 41-56. Amsterdam: John Benjamins Publishing.

Schauer, Gila A. 2004. “May you speak louder maybe?: Interlanguage pragmatic development in requests”. In EUROSLA Yearbook, vol.4, S. H. Foster-Cohen, M. Sharwood Smith, A. Sorace and M. Ota (eds.), 253-273. Amsterdam: John Benjamins.

Schauer, Gila A. 2009. Interlanguage pragmatic development: The study abroad context. London: Continuum.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

Naoko Osuka, Request strategies by Japanese students with study abroad experience, School of Japanese Studies, Meiji University, Peer-reviewed, Vol. 5, 2012, 1-18.

〔学会発表〕(計 6件)

Naoko Osuka, Pragmatic development through study abroad, JALT Conference 2013, Oct. 27, 2013, Kobe, Japan.

Naoko Osuka, Investigating mastery of conventional expressions in a study-abroad context, The 6th International Conference on Intercultural Pragmatics and Communication, May 30, 2014, University of Malta, Malta

Naoko Osuka, Pragmatic development by Japanese students studying abroad: Focusing on pragmatic routines, AILA Conference 2014, Aug. 11, 2014, Brisbane, Australia.

Naoko Osuka, Factors affecting mastery of pragmatic routines by L2 learners, BAAL Conference 2014, Sept. 5, 2014, University of Warwick, UK.

Naoko Osuka, Effects of study abroad experience on L2 learners’ pragmatic development, ETA-ROC Conference 2014, Nov. 15, 2014, Taipei, Taiwan.

Naoko Osuka, Pragmatic transfer: Pre- and post-study abroad, JALT Conference 2014, Tsukuba, Japan.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大須賀直子 (OSUKA, Naoko)
明治大学・国際日本学部・教授
研究者番号：40514162

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：